諭達第四号ご発布

会長より皆様へ

去る10月26日、御本部秋の大祭において、真柱様が教祖百四十年祭へ向けた『諭達第四号』をご発布（広く皆に知らせる事）下さいました。早速読んで下さった方もいらっしゃると思います。諭達とは、天理教のリーダーである真柱様が、私たち全ての信仰者へ向けて語りかけられる、生き方の道しるべです。諭達に書かれた通りに人生を歩めば、必ず喜びを見せて頂けます。どうかじっくりと手に取って、味わってみて下されば幸いです。

真柱様は、諭達をご発表後のお言葉で、「年祭をつとめる意味は昔から変わらないのであります。つとめる人の気持ちは、定命を縮めて身を隠してまでも、子供の成人をお急き込み下さった親の思いを思い起こして、年祭を目標に仕切って成人の道を歩み、その実（人助けの実践）をもって、お応えしようと努めてきた事においては変わりは無かったし、その基本精神は今後も変わってはならないと思うのであります。年祭をつとめる意味は変わりません。しかし、時の流れと共に、年祭をつとめる度に、そのつとめる人の顔ぶれは、多少なりとも変わって行くのであります。その中には当然のことながら、年祭の意味や、どういう気持ちでつとめるか分からない人も居るのであります。全教が心を揃えるためにも、知らない人は年祭の意味を知り、そして親（即ち親神様、教祖）の思いに添わせてもらおうと積極的に歩む、そういう気持ちになって貰う、その為の材料として、この諭達が利用して貰えればいいかと思います。」とお話し下さいました。

時代が変わりましても、人が変わりましても、教祖の年祭の意味は変わらず、十年に一度、三年間と仕切って、自分の人生を神様に丸ごとお供えするのが年祭活動であり、その三年間の気持ちの持ち方や、人だすけの為の具体的行動を教えて下さっているのが諭達第四号です。

家庭生活、社会生活は、私にも皆様にもそれぞれに在りますが、せめてこの三年だけは、寝ても覚めても親神様に自分をお供えした気持ちで、教祖にお喜び頂く為に行動し、親神様の望まれるたすけ一条の心へと近づかせて頂きたいと存じます。私自身がそのように人生をお供えさせて頂く事を神様にお誓い致したいと存じます。

大教会長　藤田大和

ひきよせ

発行所
天理教夕張大教会
〒068-0029　北海道
岩見沢市9条西6丁目21
☎ 0126-22-1248
FAX 0126-23-7275
yubaridai146@gmail.com
ホームページ
bariten.main.jp
夕張大教会
LINE 友達登録
お願いします

大教会秋季大祭の模様

秋季大祭には松田理治世話人先生が初めて巡教下さる事もあって、部内一同、大教会内外の整備を進め、多くの人がひのきしんに集まり、客殿や裏庭など境内地も綺麗に整えられた。

迎えた14日、午後3時過ぎに松田先生がご到着。役員及び直轄教会長は羽織袴にて出迎えをした。参拝後、松田先生に役員一同がご挨拶し、大教会長が一人ひとりをご紹介。この日はホテルに宿泊された。

15日は朝から秋晴れの、風のない好日であった。新たな世話人先生のご巡教に、夕張に繋がる多くの人が大教会へ足を運んだ。また少年会員の顔も多くみられ、一層賑やかな様子であった。

松田先生は午前9時頃ご到着。9時半より開扉献饌。献饌終了後、松田先生が殿内に入られる。祭儀式のち祭文奏上。その後座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められた。参拝場に並んだ椅子は埋まって、モニターを用意した食堂にも参拝者は流れるほどだった。賑やかな様子に奉仕員たちの手も力が入り、勇んだおつとめが勤められた。

講話に先立って辞令交付があり、少年会祝豊隊の新たな隊長が任命された。その後大教会長より、松田先生の経歴について簡単に紹介があった。

松田理治先生は講話にて、コロナ禍から見る神様の親心、また諭達発布を前に、ひながたを辿る事の本質、意味合いを、懇切丁寧にお説き下さった（別項にて全文掲載）。逸話や原典を例示しての、噛み砕いた分かりやすい話に、深くうなずく姿があちらこちらで多く見られ、参拝者たちの心に収まったようだった。

祭典終了後、松田先生は午後1時半頃大教会をご出立。おぢばへと戻られた。

お知らせ

第30回女子青年大会　11月27日（日）
少年会冬のお楽しみ会　12月3日
月次祭　12月15日（木）9時30分 開扉献饌

秋季大祭神殿講話

親心あふれる教祖のひながた 道の先達としての準備を

夕張大教会世話人　松田（まつだ）　理治（まさはる）　先生

本部員
海外部長
52歳

本日は、夕張大教会の立教185年秋季大祭が滞りなく勤められ、心よりお喜びを申し上げます。私は、本年4月26日付で、長らく大教会の世話人をお務めくださっていた喜多秀和先生に替わり、新たにそのご命を頂戴しました松田理治と申します。

実は世話人となるまで、夕張大教会が北海道にあることはわかっていても、岩見沢市に所在するということを知りませんでした。年齢も本部員や世話人の中では、下から数えた方が早いので、皆さまからすると頼りなく映るかもしれません。大教会長さんも直属教会長の中では、随分とお若い方ですから、これからお互いに長い付き合いになるのだろうなと、勝手ながら想像しているのです。

今日の機会に講話をするようとのご命をいただきましたので、及びませんがしばらくの間、お付き合い願いたいと存じます。

伝染病に見る神様の親心

新型コロナウイルスは英語でCOVID-19といいますが、この19というのは2019年という意味です。2019年12月8日にこの病気が中国の武漢にて初めて確認され、明けて2020年1月15日に日本で感染者が報告されましたから、3年近くもの間、所謂コロナ禍が続いていることになります。コロナの蔓延は、私たちの生活様式、つまり衣食住の全てを一変してしまいました。例えば私たちが常に着用し続けているマスクも、衣食住の「衣」の中に含まれるのでしょう。私の家族には元々マスクをする習慣がありませんでしたし、私どもの子供たちにとってマスクというものは、学校給食の準備をするために使うものだという認識でした。ところがこの3年間というものは、手に入りにくかった時期はあったものの、我が家に常備されており、ハッピを着ない日はあっても、マスクを着けない日はないという具合です。また、「食住」の領域においても、コロナは多大な影響を及ぼしています。コロナのせいで、食べるものや住むところに変化があったわけではありませんが、食事の摂り方や住まいの使い方において、特別の配慮をするようになりました。例を挙げると、教会の直会のように、今まで大勢で一堂に会して、和気あいあいと会食をすることは善であるとされてきたものが、掌を返したようにそうではなくなったわけです。こうした世界規模の疫病（パンデミック）は、今現在、生を享けている私たちには経験のないものでした。

おふでさきには具体的な病名をもって触れられている病気は、「ほふそ」、「はしか」、「これら」の3つがあります。

むまれこふほふそはしかも
せんよふに　やますしなすに
くらす事なら　（六110）

せかいにハこれらとゆうて
いるけれど　月日さんねん
しらす事なり　（十四22）

他にも、「いたみ」、「なやみ」、「でけもの」、「ねつ」、「くだり」（以上四110）、「のぼせ」、「かんてき」（以上二11）、「めへのあしく」（三139）などの語もみられますが、具体的なものは先の3つのみです。

「ほふそ」とは疱瘡、すなわち天然痘のことです。病状が進み末期になると高熱が出て、黒い斑点を生ずるところから「黒疱瘡」とも呼ばれました。「教祖伝」や別席のお話には、教祖31歳の頃、近所の預り子が疱瘡にかかり、11日目に黒疱瘡になった出来事が述べられていることから、天理教を信仰する私たちにとって、随分と聞き覚えのある病名です。同書には、

…医者は、とても救からん。と、匙を投げたが、教祖は、「我が世話中に死なせては、何とも申訳ない。」と、思われ、氏神に百日の跣足詣りをし、天に向って、八百万の神々に、「無理な願では御座いますが、預り子の疱瘡難しい処、お救け下さいませ。その代りに、男子一人を残し、娘二人の命を身代りにさし出し申します。それでも不足で御座いますれば、願満ちたその上は私の命をも差上げ申します。」と一心こめて祈願された。預り子は日一日と快方に向い、やがて全快した。（p20～21）

とあります。疱瘡は毎年のように流行した、死亡率の高い病気であり、地方によっては赤ちゃんが疱瘡を無事に乗り切ったときに、はじめて名前を付けるところもあったそうです。

ちなみに私の父は、幼少の頃にこの天然痘に罹っています。私の祖父母は戦前戦中に、中国の上海にあった上海伝道庁、次いで南京にあった華中伝道庁におりましたので、父は南京で生まれ、そこで罹患しています。ですので、顔をよく見ると、側面に所謂あばたというものがあります。

「はしか」についてですが、私たちが一般的にはしかと言っている

のは、麻疹と呼ばれるものです。また、三日はしかというものもありますが、これは風疹のことです。おふでさきの「はしか」は、麻疹の方になると思います。麻疹は、現在では子どもの病気の代表格のように思われていますが、鎖国が解かれる前の江戸時代においては、20年から30年おきに流行しました。ですので、子供のときにかかる機会のなかった成人にまで感染が及んで重症化し、死に至る人も多かったようです。

「これら」は、読んで字の如くコレラで、菌による経口感染症の一つです。先ほどのおふでさきが書かれたのは明治12年（1879年）ですが、その年には明治に入ってから最大の大流行がありました。コレラは1817年にインドのカルカッタで流行したのが発端となり、当時鎖国中の日本においても、その5年後の1822年に朝鮮半島を経て対馬に入ってきたと言われています。

その明治12年ご執筆のおふでさき第14号に、親神様は以下のようにお論しくださっています。

せかいにハこれらとゆうて
いるけれど　月日さんねん
しらす事なり　（十四22）
せかいぢうどこの人でも
をなぢ事　いつむばかりの
心なれとも　（十四23）
これからハ心しいかり
いれかへて　よふきづくめの
心なるよふ　（十四24）

コレラは親神様のざんねんの表れであると仰せになり、そのざんねんは人間のいづむ心、つまり意気消沈した心によるものであるから、心を入れ替えて陽気になりなさいとお教えくださっています。殊に、「みのうちにとのよな事をしたとても」と教えられていますから、私たちが一般的に病気と呼んでいるものは全て「やまいでわない月日ていりや」と、月日親神様のお手入れで、新型コロナウイルスも、その「どのよな事」の中に含まれると考えます。この度の新型コロナウイルスの大流行も、私たちのいづむ心に対する、親神様のざんねんの表れだと私は悟ります。

新型コロナウイルスは今後どうなっていくのかはわかりませんが、私たち人間の成人の歩みが、教祖のご期待通りに進んでいないと思わざるを得ません。私を含め、遅れをとっている者は、その遅れを取り戻すべく、この感染症に込められた教祖の思いをより深く求めて、教祖がお望みくだされているような陽気ぐらしを実践することを、共々にお誓いしたいと存じます。

『ひながたの道を通らねば ひながた要らん』

さて本年は、人類が未だコロナ禍に苛まれつつも、本教にとって大変重要な年になりました。1月4日の年頭あいさつにおいて真柱様は、「教祖百四十年祭は勤めさせていただきたい」という旨をお話しくださいました。そして26日の秋季大祭には、真柱様より、教祖百四十年祭を迎えるに際しての論達が発布されます。前回のものは論達第三号でしたから、今回は第四号になるのでしょう。そして来月11月より本部巡教が実施され、それを受けて各直属教会は全教会一斉巡教に踏み出し、来年5月末までに終えることになっています。教祖年祭をつとめる意義については、当教会での本部巡教の際に、巡教員の方よりお話しいただくとして、今日のこの場では教祖のひながたを辿るということについて話を絞りたいと思います。

「ひながた（雛形、雛型）」という語の意味は、辞書によると「実物を小さくかたどって作ったもの」、「模型」、あるいは「形式、様式を示す見本」とあります。「実物を小さくかたどって作ったもの」や「模型」という意味においては、例えば建物などの完成予想図とか、完成予想模型などに当たるのだろうと思います。「形式、様式を示す見本」という意味においては、学校の習字（書写、書道）のお手本などが思い浮かびます。ちなみに英語では model と言います。

そうした模型、見本、手本というものはよくできてはいるものの、それを飾って眺めるだけではいけません。完成予想図や模型を飾っておきながら、実際に建物の建築を進めないというのは、本末転倒の話です。また、習字のお手本を壁に貼って、「ああ、よく書けてあるな」と言うのでは、何の感動もないものです。やはり実行に移してこそ、模型、見本、手本の存在価値があります。教祖のひながたも同様、ただ話に聞いたり、教祖伝を読んだりして、「ああ、素晴らしいな」と感じるだけでは、信仰者として十分ではないはずです。おさしづに、

ひながたの道を通らねば
ひながた要らん。
（明治22年11月7日）
ひながたの道より道が無いで。
（同右）

と教えられているように、実地にひながたの道を通る、つまりひながた通りの考えや行いを心がけることが大切です。

余談ですが、私には小学校5年になる長女がいます。普段はあまり字がきれいでないのですが、学校で習字の時間があった日は、いつも素晴らしい作品を持って帰って来ます。それは何故かというと、今の習字の時間は、お手本を横に置いて、それを真似て書くのではなく、お手本を半紙の下に敷いて、

みのうちにとのよな事を
したとても　やまいでわない
月日ていりや　（十四21）

なぞるそうなのです。この手法は敷き写しというらしく、こうすることによってお手本と寸分違わぬものが書けることになります。文字のバランスや書き順を学ぶ上で、初期の段階としては効果的であるとされています。これは彼女の通っている小学校だけなのか、地域的なものなのか、全国的なものなのかどうかわかりません。また、敷き写しについては、いろいろ調べてみると賛否があるようですが、私は形から入るということにおいて、ありだと思っています。ひながたを通る、ひながたを辿る、お道を通ることについても同じで、形から入ることが大切かもわかりません。

教祖はご自身の道すがらを、ひながたとは呼ばれていません。しかしながら現身を隠されて以降、先程紹介した明治22年11月7日のおさしづの中で、ひながたを通ることの大切さについてお論しいただいています。教祖がひながたをお残しくださったのは、「私がつけた、私が開いた道を通っていれば間違いはないよ」という、教祖の親心の表れに他なりません。

教祖は今尚ご存命なれど、私たちはお姿を拝することはできません。よって、ひながたを何から学ぶかが大切になってきます。まずは、『稿本天理教教祖伝』がありまず。また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』もあります。

ここでは逸話篇から、どのようにして教祖のひながたを、私たちの実生活に活かしていくか考えてみましょう。まずは逸話篇一九「子供が羽根を」の一部を引用します。

…みかぐらうたのうち、てをどりの歌は、慶応三年正月にはじまり、同八月に到る八カ月の間に、神様が刻限々々に、お教え下されたものです。これが、世界へ一番最初はじめ出したのであります。お手振りは、満三年かかりました。教祖は、三度まで教えて下さるので、六人のうち三人立つ、三人は見てる。教祖は、お手振りして教えて下されました。そうして、こちらが違うても、言うて下さりません。

「恥かかすようなものや。」と、仰っしゃったそうです。（p27）

先んじてこの道に入ったお互いは、教えを知らない人々に教えを伝えるということが欠かせません。やがて信仰の入口に立つようになった人々には、おつとめを勤めることの大切さを説くことが求められます。そのおつとめを教える、ここではおてふりを教えることが紹介されていますが、この逸話より学ぶことのできることは主に二つあると考えています。一つは自ら教えるということです。決して人任せにはしないということです。もう一つは間違いを指摘して、恥をかかせるようなことをしないことです。ともすれば私たちは、届かないながらも一生懸命やっている人たちの、取るに足らない間違いに対して、人前で叱責するようなことはないでしょうか。

また、逸話篇四五「心の皺を」には、以下のように記されています。

ある時、増井りんが、お側に来て、「お手許のおふでさきを写さして頂きたい。」とお願いすると、「紙があるかえ。」と、お尋ね下されたので、「丹波市へ行て買うて参ります。」と申し上げたところ、「そんな事していては遅うなるから、わしが括ってあげよう。」と、仰せられ、座布団の下から紙を出し、大きい小さいを構わず、墨のつかぬ紙をよりぬき、御自身でお綴じ下されて、「さあ、わしが読んでやるから、これへお書きよ。」とて、お読み下された。りんは、筆を執って書かせて頂いたが、これは、おふでさき第五号で、今も大小不揃いの紙でお綴じ下されたまま保存させて頂いている、という。（p80）

ここで大切なことは三つあると考えています。一つ目は、教祖は物を生かして使っておられることです。二つ目は、物を生かすことにも通ずることですが、形に囚われないということです。三つ目は、何よりも実動をお促しになっているということです。

さて、教祖のひながたとは、90年のご生涯全てを指すのだと考える方もいらっしゃるかもしれませんが、このひながたとは、天保9年10月26日以降の50年間、つまり教祖が神のやしろとお定まりくだされてからのご足跡を指すと、私たちは教えられています。教祖が神のやしろとお定まりになる以前の、最初の41年間については、『稿本天理教教祖伝』第2章の「生い立ち」に、その様子が描かれています。この章を拝読すると、私はいつも、中山みき様は非の打ちどころのない完全なるお方であった、という印象を強く持つのです。幼少期から心優しく、思いやりのあるお方で、親からいただいたお菓子などを、泣いている子供に与えて、その喜ぶのを見てお楽しみとなされるようなお方でした。尼となって仏の道にその生涯を捧げようといわれていましたが、奇しきいんねんによって元のやしきに引き寄せられ、中山善兵衛様に嫁がれました。まめやかに夫に従い、両親に仕え、周囲の人々にも親しく接しておられました。また、家業にも精を出され、中山家の生業であった農業の仕事のうち、なさらなかったのは荒田起こしと溝堀りくらいなもので、他のことは人の二人分ほども働かれたとあります。荒田起こしというのは、稲刈りが終わって田植えまでの約半年間、田畑を寝かせておきますので、田植え前に土を掘り起こす作業をいい、大変骨の折れる労働で、当

前日14日、ご参拝頂き、役員、直轄教会長皆で第一客殿で世話人先生へご挨拶。大教会長から、それぞれの紹介があった。

時は男の仕事と言われていました。

他にも、なまけ者や盗人も感化され、さらには、自分を無きものにしようとした者に対してすらも、その罪を責めることはありませんでした。

教祖伝には、中山家には、ある女性が働いていて、教祖をなきものにしてその座を取って代わり、善兵衛様の妻と収まろうと企てました。そこで教祖の食事に毒を盛ったのです。これを召し上がられた教祖は激しく苦しまれたので、家の中を詮索するとその女性の仕業であるということがわかりました。しかし、教祖はその者を咎めることなく、「これは、神や仏が私の腹の中をお掃除下されたのです」と仰って、その者を容されました。さらに先程も触れましたが、家から預かって世話をしていた乳飲み子が病んだ時には、我が子二人の命と我が命にかえて、この預かり子の命をおたすけくださいと、一心に祈願をおかけになりました。教祖は、元初まりのお話によると、人間創造の際に母親の役割をつとめられた、いざなみのみことの魂をお持ちであるということですから、教祖は私たち全人類の母親である故、このようなご行動も、全く理解が及ばないという訳ではありません。立教以前の中山みき様は、当時の一般的な慣習に基づいていうところの、模範的な子どもであり、模範的な主婦であったわけです。

ただし、立教以前の中山みき様の足跡について、私は「模範的」という語を使いましたけれども、やはり全生涯のうち最初の41年間は、教祖のひながたの一部とはなり得ません。

村人や近村の人々は、みき様の慈悲深いお姿を拝して、「まるで神様のようなお方や」と、慕い仰がれたことでしょう。しかしながら、神のやしろとお定まりくだされてからは、皮肉なことに周囲の目には、もはや神様どころか、何かに憑かれた人のように映り始めていました。「貧に落ち切れ」との思召のままに、中山家の財産を貧しい者に施し尽くされることは、とても周囲の理解の及ぶところではなかったからです。難儀している人を見ては、やっとのことで手にした米さえも、何の惜気もなく施されました。50年のひながたにおける教祖のこのような行いは、私の心を捉えて放しません。それでは、教祖の貧に落ち切るという行為は、一体どのように陽気ぐらしに繋がるのでしょうか。

いかなる境遇でも喜び通られたひながた

教祖は、たとえどんな極限の状態にあろうとも、陽気ぐらしができるのだということを教え、そして、身を以って示そうとなされたのではないかと思っています。『稿本天理教教祖伝』には、

…月の明るい夜は、「お月様が、こんなに明るくお照らし下されている。」と、月の光を頼りに、親子三人で糸を紡がれた。（p39～40）

とあります。これらを読むごとに、美しい情景が目に浮かんでくるのです。しかしながら、自分の身をこの状況に置くとどうでしょうか。この「糸」というのは絹ではなく、中山家は綿作をされていたことから恐らく木綿糸のことだと、容易に想像ができます。綿を収穫して、そこから衣服に仕立てるまでの、最初の作業が糸を紡ぐことになるわけですから、そこからまだまだ先があります。別席のお話には、「機を織り糸を紡ぎ、針仕事をして、ながらくの間、難儀苦労の道をお通り遊ばされて」とありますから、貧のどん底を通っておられた教祖はじめ中山家の方々は、自分たちの着る物もご自身たちで全て整えられたのだと推察するのです。現代の私たちにとっては、気の遠くなるような作業ですが、教祖と秀司先生こかん様は、こんな道中でも親神様のご守護をひしひしと感じながら、いそいそと働かれたのです。更には、

夏は、ひどい藪蚊に悩まされ、冬は冬とて、枯れ葉小枝をくべて暖をとりながら、遅くまで夜業に精を出された。

こかんが、お母さん、もう、お米はありません。と、言うと、教祖は、「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」（p40）

と記されています。

蚊に刺されると、単にかゆいだけ、眠られないだけではなく、病気の心配があります。また、「冬は冬とて」と簡潔に記されていますけれども、教会本部の冬場の朝夕のおつとめが、朝は午前7時、夕は午後5時で、日の出日の入りに合わせられていますから、一日の半分以上は暗闇である。ということになります。「枯れ葉小枝をくべて暖をとり」とありますが、おそらくそうすることで明かりも得ておられたのでしょう。枯れ葉や小枝を燃やしても長時間持続しませんから、何回も何回もくべながら、夜業をなされたのだろうと思っています。

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、…お與え下されてある」のくだりは、貧のどん底を通る教祖を偲ぶ上で特に有名な箇所ですが、ここを深く掘り下げてみると、当時は全国的に、冒頭で触れた疱瘡、麻疹、コレラが流行した時代でした。疱瘡は毎年のように流行る病気であり、麻疹は十数年から二十数年の周期で発生する

ので、コレラは日本人にとって新しい病気でした。中山家が貧の道中にあった時期に、この3つが同時に流行して民衆を苦しめたのです。

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、・・・苦しんでいる人もある」という状態の人は、あちらこちらにたくさんいた時代でした。その中でも、「水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお與え下されてある」と、教祖はいかなる境遇にあっても、喜びを見つけてお通りくださり、素晴らしい手本をお示しくださっています。

教祖伝をひもとくと、ひながた50年の道すがらの半分が、このようにして過ぎていったことがわかります。やがて、よろづたすけの道あけとなった、をびや許しや、後年教えられた、つとめとさづけによって示された、珍しいたすけにより、道はますます伸び広がりました。

しかしながら、教えを求める人々が増えるにつれて、他宗の人々などによる反対攻撃や、度重なる留置投獄へとつながった、警察をはじめとする官憲による迫害干渉が、教祖に及ぶようになりました。しかし、教祖は寄り慕う人々に「ふしから芽が出る」、「ふしから芽が吹く」と繰り返し仰せになっています。私たちが信仰生活を送る中で、お見せいただく困難な状況を、「ふし」と呼んでいます。教祖伝でも別席のお話においても、教祖の御苦労の度ごとに、お迎えの人々の数は尚も増すばかりであったとお聞かせいただきます。

三年千日に向け、心構え、心づくりを

教祖のひながたは、私たちから見れば厳しい50年でありました。しかし親神様はひながたを丸々50年通れとは仰せになっていません。先に触れました、「ひながたの道を通らねばひながた要らん」、「ひながたの道より道が無いで」と教えられているおさしづ（明治22年11月7日）には、せめて10年のうち3年をしっかり通れと仰せられています。

ひながたの道を通らねばひながた要らん。ひながたなおせばどうもなろうまい。（中略）口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。（中略）三年の道通れば、不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん。（明治22年11月7日）

このおさしづは、教祖年祭に向かう三年千日の旬の典拠となっているもので、おそらく本部巡教でも詳しく説明があるだろうと想像していますので、ここでは詳しくは触れませんが、3年間ひながたに沿って通り切れば、おさしづ文中の「不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん」というご守護をお約束下さいます。ここに如何に、教祖のひながたが親心あふれるものであるか、そして、ひながたを通るということがありがたいということが、お分かりいただけるでしょう。本部巡教が終われば、大教会の主たる立場の方々は、教会に繋がるようぼく信者さんたちにその理を伝え、教会の指針を説明して、共に実践を働きかけることになりますから、今は道の先達としての準備がとても大切です。その時になって「教祖の年祭ってどういうことですか？」と尋ねられてから勉強していては、3年はどんどん削られていくことになります。

10月に諭達が発布され、三年千日の旬が始まるのが来年の1月26日ですから、それまで3ヶ月あります。だからこそ今から心構え、心づくりをする準備が欠かせません。同時に、これからの3年は人間にとって決して短くはないので、三年千日を通して力を継続する覚悟を、今から定めておくことをお願いして、本日の務めを終えたいと存じます。ご清聴ありがとうございました。

久々の賑やかな詰所

立教185年の本部秋季大祭では、教祖百四十年祭に向けての諭達が発布されるという事もあり、多くの夕張に繋がる人がおぢばへと帰り、詰所には47名の帰参者が集った。宿泊棟は三階まで部屋が埋まり、数年ぶりといっていい賑わいとなった。続々と到着する帰参者たちは、一様に「ただいま帰りました！」と勇んだ声で詰所に入り、受け入れスタッフも忙しさの中にも、大きな喜びを持って出迎えた。

25日午前には、大教会長の発案で、回廊拭きのひのきしんが行われた。高らかによろづよ八首を奉唱しながら、老いも若きも気持ちの良い汗を流し、一歩一歩丁寧に西回廊を拭き進んだ。その後、元気に終了した事を親神様にお礼し

26日 詰所で朝づとめ遥拝

25日 大教会長さんと回廊拭きひのきしん

ようと、西礼拝場にて揃っておつとめを勤めた。この日の回廊ひのきしんの参加者は12名だった。

25日夜、詰所講堂にての夕づとめでは、参拝場がたくさんの帰参者で一杯になり、挨拶をした大教会長も大変感激の様子だった。

迎えた26日、秋季大祭当日は朝からすっきりとした青空が広がり、心地よい秋晴れの天気になった。この大祭より東・西・北礼拝場は一般参拝者に解放され、それぞれが思い思いの場所で立教に縁ある大祭を参拝した。祭典後にはご身上の真柱様が壇上に上がられ、自ら『諭達第四号』を読み上げられた。久し振りの真柱様の肉声に一同感激し、涙を流す者も少なくなかった。

長沼分教会

27日には青年会総会があり、夕張分会からは4名が参加した。前日に引き続き真柱様からご挨拶を賜り、参加者一同は深くお言葉を胸に刻んだ。第二部は第二食堂に場所を移し、青年会長様の若くも力強いお言葉に、来る三年千日での活躍を誓うのだった。

大祭終了後、帰参者は三々五々、帰路に着いたが、それぞれが神様から大きなお土産を頂いて帰ったことと思う。「ありがたい」「嬉しい」という言葉を形にしたような笑顔が、詰所で、またおぢばでたくさん見ることが出来た。またコロナ禍以降火の消えたようだった詰所にも、修養科生・講習生が立て続けに入り、少しずつかつての活気が戻ってきている。年祭へ向かう三年千日、一人でも多くの人をお連れして、おぢばへ帰りましょう。

馬追分教会

継立分教会

青年会 3年ぶり 青年会総会

本部秋季大祭の翌日27日、3年振りの開催となる、青年会総会が行われ、夕張分会からは、藤崎勇委員長、竹田元副委員長、高橋悟志副委員長、千葉祐生前副委員長が参加した。

未だコロナの感染状況が落ち着かぬ中、今回は各分会リーダー層に参加者を絞っての開催となった。まず本部東礼拝場に集合し、中山大亮青年会長様の拍子木に合わせて、一同でおつとめを勤めた。その後真柱様がお出まし下され、一言ご挨拶を下された。そして真柱様から青年会員に向けたメッセージが、中田善亮表統領によって代読され、「来る三年千日を、青年会員の徳分たる若さと勢いで、あらきとうりようの役目を果たすよう」との言葉に襟を正してしっかりと胸に納めた。

第二部は会場を第二食堂に移動。会場が暗転すると、中央にスポットライトが集まり、そこにはステージに立った青年会長様。世界的経営者のプレゼンのように、ゆっくりと周りを見渡しながら、『対話』の重要性とそこから生まれる『気付き』によって互いに成人していく、という話をされた。引き続いて、青年会長様の話を台に、二人一組に分かれて『対話の時間』が行われ、それぞれ相手の話を聴き、質問によって互いの気付きを生み出して、非常に充実した時間となった。最後には矢追雄蔵・青年会委員長が壇上で、熱く青年会長様の期待に応えて力強く実動することを誓い、その勢いのまま全員であらきとうりよう指針を唱和、円になって肩を組んでの青年会歌の大合唱で、大盛り上がりの空気の中、総会は終了した。

◇◇◇◇◇◇◇◇

読者の便り 夫婦仲良く郷土民謡

本三川分教会所属の教会役員、近藤秀雄さん幸子さんご夫妻（写真）は若い頃より仕事の傍ら、地元由仁町の民謡教室にて唄と三味線を習われていました。

「教室在籍年数は長いけれど農事の忙しい折などはなかなか通えず本格的に通いだしたのは、仕事を辞めてここ5、6年くらいです。」とのことです。

それでも天性の素質と好きこそものの上手なれと言われるように、ここ数年の内に更なる上達をされ、奥様の幸子さんは今年4月旭川で開催された第23回日本郷土民謡民舞全道大会シニア部門（唄の部）で優勝されました。また、10月23日には民謡教室の先生、お仲間と一緒に埼玉で開催された全国大会にも出場され幸子さんは唄、秀雄さんは伴奏の三味線で大いに健闘されました。「これからも元気なうちは請われるまま誘われるままに教会の御用と共に趣味も楽しみたいと思います」とのことです。

ふうふそろうてひのきしん
これがだいいちものだねや
（十二下り目　二ツ）

ふたりのこころををさめいよ
なにかのことをもあらはれる
（四下り目　二ツ）

『夫唱婦随』の名演に心からエールをお贈りしたいと思います。

（本三川・眞鍋桂司）

訃報

天理教祝豊分教会三代会長 小野寺 梅子様

享年一〇四歳

去る10月31日、祝豊分教会三代会長をつとめられた小野寺梅子先生が、悔しくも出直された。享年は百四歳であった。

姉は南阿大・山部分教会より、二代会長の小野寺信治氏の後妻として教会に入り、教会の内外ともに睦まじく通られて、肺病をご守護頂いた堅い信念から上級志加ノ谷、栗山や大教会の御用を欠かすことなくつとめられていた。昭和59年3月より、長く三代会長としてつとめられておられたが、高齢となって後進に譲られて、施設にてゆっくりした年月を重ねておられた。

10月31日午後4時半、安らかに出直されて、11月2日には時節柄、家族葬でお別れをした。

永きに亘る大教会へのおつとめに対しお礼を申し、謹んで哀悼の意を表します。

女子青年 こかん様に続く会

10月23日、大教会にて、こかん様に続く会を開催。女子青年会員3名、婦人会員4名が参加した。10時に集合し、まずは自己紹介。その後、大教会内清掃ひのきしんをして、昼食をとった。

午後から藤田美重子支部長からこかん様について等、お話して頂き、ねりあいの時間がもたれた。

11月27日、いよいよおぢば開催される、女子青年大会についての打ち合わせもされ、おぢばで集結することを楽しみに解散した。

教人資格講習会中期 日々の喜びを態度に

馬追　古屋くみ子

5月に講習前期を10月に中期を受講させていただきました。前期・中期とも一緒に行ったお仲間から受講お誘いの声をかけていただき「あっ、そうなんだな…」と思い立たせていただきました。修養科修了から20年ほどが経っており、きっと今がその時なのだろうと、声をかけていただき有難いことだと思いました。

前期では3歳のお子ちゃまが居てくれて、いつも笑いがあって楽しく過ごすことが出来ました。中期では前期の学びを土台としてお手ふりや鳴り物、教祖伝を集中的に学ばせていただきました。

授業では教祖が仰った御言葉を先生方から聴かせていただき、また振り返りや演習の時間で皆さんとの語りから私は家族のことを思い浮かべていました。主人や子ども達に対してどのような心遣いをしていたかな…暖かな繋ぎの言葉を使えていたかなと。先ずは私自身が日々喜べるよう努めさせていただき、その喜びを態度に映せるよう一歩ずつでも前に進めるようにと思っています。

大教会日誌抄 10月

1日　たすけ推進会議
境内地、神殿、茶室整備
2日　会長、保護司活動
境内地、神殿整備
4日　支部例会、
会長保護司活動
5日　会長、清眞布分、巡教
6日　ひきよせ編集
7日　会長、旭都分、巡教
8日　会長夫妻、長沼分、巡教
10日　前会長、峰延分、巡教
11日　会長、北夕分、巡教
12日　会長夫妻、理喜道分、巡教
会長夫妻、馬追分、巡教
大祭準備　～14日
14日　世話人 松田理治 先生ご参拝
15日　秋季大祭 松田先生ご巡教
17日　前会長夫妻、札美分へ～21日
18日　会長夫妻、栗山分、巡教
19日　会長夫妻、札美分、巡教
21日　国道みまもり隊活動
22日　会長、おぢばへ
23日　会長、兵神大教会参拝
こかん様に続く会
24日　会長本部神殿当番
前会長夫妻、おぢばへ
26日　本部秋季大祭
諭達 第四号 ご発布
27日　教祖140年祭
三年千日 決起の集い
28日　本部青年会総会
会長、新任直属教会長講習会
前会長夫妻、帰会
29日　会長、帰会
31日　会長、保護司活動

庶務部 10月

▽初席
中右友梨（理喜道）　10・26
松尾柊斗（継立）　10・26
▽おさづけの理拝戴
富山理雄（栗山）　10・29
▽教人資格講習・中期　10・2～6
安藤眞佐代（馬追）
古屋くみ子（馬追）
▽教人資格講習・後期　10・7～11
熊谷明人（清眞布）
▽教会長資格講習　10・27～11・16
竹田　元（馬追）
▽三日講習会Ⅲ　10・4～6
山崎親吾（北張）
▽青年会ひのきしん隊　世話班
竹田　元（馬追）10・3～22
▽詰所ひのきしん　10・23～26
山根ふじの（善進道）
西山菜穂子（善進道）
▽おまもり　1件
▽詰所教養掛
11月　藤﨑　勇（旭都）
12月　竹田　元（馬追）

こどもたちも
ひのきしん！